

## 自治医科大学に対する思い（感謝と期待）

全国自治体病院協議会名誉会長  
地域医療・介護研究会JAPAN会長  
邊見 公雄



現在、全世界がCOVID-19のパンデミックで覆い尽くされている。世紀難、人類難、地球難とも言えるものであるが、一方で地球は喜んでいるのかも知れない。アマゾンやコンゴ川流域の中央アフリカ、ボルネオやニューギニアの東南アジアなど生物多様性の最後の楽園で森を伐採、温暖化を加速しオゾン層も破壊、更にプラスチックごみで海洋汚染。魚介類や海鳥に迷惑をかけている“人”を減らし地球を守ろうとしているかに思えるのである。

さて冒頭から話が脱線気味であるが、今回、学長永井良三先生の命を受け貴学に対する人一倍強い思いを書かせていただく。貴学設立の昭和47年（1972）といえば、私は奈良県の大和高田市立病院で駆け出し外科医だった頃である。田中角栄首相の日本列島改造論で今の中国や東南アジアと同じ高度経済成長の真っ只中であつた。同時に医療格差を無くそうと一県一医大の政策も。自治医科大学はちょうどその中間、真ん中あたりに誕生した新設医大である。初代学長は、我々青年医師連合がインターン闘争を行っていた時の東京大学医学部教授だった中尾喜久先生と承知している。後年、貴学の入学式や卒業式、講演などに招かれて高久史麿先生のお部屋に掲げられた写真で確認も出来た。

貴学40周年記念式典に招かれた時、40年間で学長は2人しかいないことに気付いた。日替わりトップの組織では中長期のビジョンは実現できない。私も院長在職22年のうち初めの頃は院内融和優先で自分色は出せず、任期中程でプランを出し後半で実現できた。永井学長にお会いした時「先生も20年やられるんでしょうね」と水を向けると「こらえてください。殺さないで」とかわされた。夢が現<sup>うつつ</sup>になってほしい楽しいエピソードとしてご紹介した。

さて、私は徳島県の山間部、四国三郎吉野川の中流域で育った。旧満州国からの引き揚げである。医療過疎の地域でもあった。自治医科大学は全国47の都道府県が資金を出し合い、全国の医療資源の均てん化、無医村（地区）の解消を目的に設立された私立医大である。定員は、初めは47都道府県から2名ずつ、栃木県は地元ということで少し上乘せがあつたようである。その後、文部科学省や厚生労働省の方針で医師の少ない県に1名ずつ加算されている。また少し話が逸れるが、私は新設医大に大きな期待をしていた。しかし

今はかなり失望している。これらの大学には旧来の医学部にはない新しいことをして欲しいと願っていたのであるが、徐々に旧来の方向に溶け込むというか戻ってしまったように感じる。学閥の復活や論文至上主義などである。自治医科大学は、患者ファーストやチーム医療などの面では伝統や旧弊が少ないだけ早く進んだ面も多いが、教授選考や学長選などは旧設大学のそれを踏襲している。それでも存在感で最も輝いている大学は自治医科大学と確信している。

今、政府や厚労省は三位一体の改革という政策を医療の世界でも繰り広げている。“地域医療構想”“医師の偏在対策”“医師の働き方”という3つを同時に一体的にやろうというものである。まず“地域医療構想”というのは、多くなりすぎた？病院の数を減らし集約化、機能分化と連携で効率的にという財務省や経済産業省の言う生産性を上げるというもので、官邸主導の経済財政諮問会議の骨太の方針に沿うものである。私は、医療に生産性という言葉は馴染まないと従来から思っているのだが、日本株式会社をずっと牽引している永田町や平河町ではこの言葉がよく使われる。よく引き合いに出される農業は理解できるが、医療から無駄をなくすなら余り治療はせず、健康寿命と平均寿命が同じになるのが医療費亡国論に応えるベストの選択かも、とシラケたりする。

今回の改革では、病床機能報告制度という入院患者数などの報告を基に、再編統合の検討が必要な全国424病院の公立病院が指定された。その後データ誤りなどで増減し、現在は436病院である。当時、私が関わり統合され既に廃院となっている病院もリストにあり、これにはビックリ。同じような例は私の故郷徳島県にも見られた。最も驚いたのは、私の弟が院長を務めている病院もこの中に入っていたことである。この病院は徳島県で5指に入る手術件数を誇り、その地域のNo1病院、中核病院である。後程、厚労省高官からデータミスとの謝罪があったらしいが、風評被害で内定の看護師や研修医が来なかったとか。このことを少し長く書いたのは、これらの病院には自治医科大学を卒業した医師達が大勢働いておられ、僻地や離島、中山間地も含めて地域住民の生命を守り、健康な生活を維持するために献身的に貢献されているからである。全国自治体病院協議会などの調査によると、この436病院のうち200近い病院が今回のコロナ禍に対応しているとのことである。再編統合が予定通り進んでいたらと考えるとゾッとする。

第2波の頃だったと思うが、夕食時にたまたま見ていたテレビに池上彰氏が現れた。「地域医療構想」という言葉が聞こえたのでじっくりと見ることにした。発言の内容は「都会の方は余り知らなかったかもしれませんが、今、地域医療構想という政策が進められています。簡単に言えば人口が減り患者さんも少ない地方の病院を減らし、効率的にするという計画です。これが進んでから今回のコロナが来ていたとしたら地方は大変だったでしょうね」というもの。私も同感。更に私は、勤務医師の働き方改革も予定通り進んでいたら、ICUや入院患者のかなりの方々が亡くなっていたのではと考えている。ここで働く医師や看護師、臨床工学士は9時5時でなく使命感、本当のプロフェッショナルオートノミーだったのである。今回のコロナを契機に、三位一体の改革は少し考えなおす必要があ

ると多くの現場の医療人は訴えている。大本営は最前線をしっかりと見ていただきたい。

また、タラレバの話で恐縮だが「もし自治医科大学がなかったら」日本の地方の殆どは医療砂漠化していた筈である。校歌にある如く「医療の谷間に灯をともす」を実践していただいている。感謝感謝である。総合診療や地域医療の指導者も大勢輩出されており、将来にも希望が膨らむ。特に、卒業生には他の大学に比べチーム医療に最適の医師が多い。これには全寮制が大きく貢献しているものと勝手に解釈している。卒業式の日には食堂や事務職員の方々との花束や記念品の贈呈、写真撮影からもよく解る。同じ釜の飯を食った仲間であり、学生であったとしても地域の社会人だったのである。

ここからは少しお願いというか夢の提案をしたい。医療の無い所に人は住めない。先の首相安倍晋三氏は「国の隅々まで美しい国にする」と唱えられた。残念ながら7年余の最長政権の間に結果は逆となり、東京一極集中が加速した。政官財の最強のトライアングル、教科書ではまだ三権の一角である司法、今や無敵のメディア、学生だけで52万人を数え浪人や院生を加えると私が育った徳島県を超える70万人余の大学生を中心とした教育、更に皇室までも。3密どころか7密である。これが今回のコロナが長引いた一因であることは誰の眼にも明らかである。

医療での貢献は更に増強してほしいが、是非とも“大医”“国手”を目指して地方創生研究所（仮称）を大学として設置してほしい。今回、その必要性和脆弱な体制が浮き彫りになった保健所への医師や保健師、看護師も育ててほしいし地方重視の政策も提案していただきたい。官邸や財務省に忖度することなく地方の時代を空念仏に終わらせないためにも。産婦人科や小児科、精神科などを中心に集学的「こども科」つまり不妊治療や人工授精、自閉症、ADHD、DVなどを一括して診る部門の創設はどうであろう。病児学級などを豊かな自然溢れる大学周辺に配置するのは決して夢ではない。最近の子供に多い食物アレルギーも農業県栃木と共同で研究したら楽しい。“とちおとめ”アレルギーは聞いたことも見たこともない。米アレルギーも。あれば生き残れなかったかも…。獣医学部門と協力し、これから増え続けるであろう人獣共通感染症の研究などもおもしろい。いずれにしても最先端を走る大学となっていただきたい。

現在、超高齢化社会の地方で活躍しておられる卒業生には発展途上国での老人医療や総合診療の指導、フレイルやロコモ、認知症の予防などその経験を活かしてほしい。国際部を創り、学生の視野を広げる機会を与えてウィンウィンの関係を築いてほしい。国内的には、各地の同門の先生方との病理診断や放射線治療は勿論、オンライン診療や遠隔手術などの遠隔医療の促進もお願いしたい。学会や研究会、研修会などを統括する部門を創り、自治医科大学学会的なものを開催し生涯学習のモチベーション維持に寄与してほしい。また、隠岐島前で大活躍の“島医者”白石吉彦先生が「赤ひげ大賞」なるものを受賞されたが、自治医科大学として地ビールならぬ“自（地）医者大賞”のようなものを出してはどうだろう？選考委員は当然に首都圏や政令指定都市居住者は認めず、大字田舎字ド田舎をよく知っている方を中心にである。

自治医科大学関係者にもお願いしたいことがある。地方特有の風土病的なものや言い伝えない治療法、薬草や郷土食など医食同源を裏付けるものが数多くある筈である。寺社や郷土史家などと協力し、医学史を風土記的に作成するのも他の医育機関では不可能なニッチな分野と考える。「物好きもエエかげんせえ」と言われるかもしれないが、好き者がいないと歴史は進まず後世には残らない。アニキサスやツツガムシ病、マダニ咬傷、水俣病、イタイタイ病、皆地方の実地臨床医達の報告から判明したものである。「現場に出て、現物を見て、現実的に考える」三現主義からの賜である。北里柴三郎や野口英世、若月俊一という先生方がその代表であるが、次は自治医大卒業生からと念じている。

次に大学の立地と卒業生の分布から、今後延びるであろう分野を挙げてみたい。園芸療法とアニマルセラピーである。私のフィールドワークの地、赤穂市を流れる千種川の上流に西播磨総合リハビリテーションセンターという県立病院がある。貝原俊民知事の時代に創設され、神戸市玉津にある県立リハビリテーションセンターの弟分である。兄貴分の方はベトナムの双子児ベトちゃん・ドクちゃんの分離後、義肢を作ったことで有名であるが、弟分のここは京阪奈の2府1県の関西学研都市から外れた兵庫県が独自に進める学園都市の中にあり県立粒子線治療センターや和歌山県で発生した毒カレー事件のヒ素を検出したスプリングエイト（理化学研究所等）なども隣接している。森林を開拓して造成した自然の真ん中に位置する。森林浴をリハビリに利用したり草花を種播きから育て生け花までの園芸療法にピッタリの場所である。アルツハイマーなどの認知症の方々にも試行しているとか。自治医科大学も自然環境に恵まれた所にあり、是非このような取り組みを推進していただきたい。

アニマルセラピーであるが、赤穂市民病院では20年位前に私が採り入れた。個々の患者にではなく集団なので効果の検証は出来てないが、私が回診しても余り心を開いてくれない老婦人が犬を抱いて微笑んだり、自閉症の子供が仔犬とじゃれたりしているのを見ると少しは効果があるのではと思っている。認知症に関しても進行を遅くしているようにも感じている。余談になるが、Pet For Life Japan（略してPFLJ）というNPOには私も関係している。捨て犬や捨て猫をリクルートして里親に育ててもらったり、アニマルセラピーのセラピー犬として育てたりする団体である。飼い主の事情によっては一時預かりやペットホテル的な仕事もしている。

私は消化器外科医だったが、「検査の結果、癌がみつかりました。手術が必要なので入院してくれますか？」と告げると「入院できません」と。「なぜ？」と聞くと「ペットの世話をしてくれる人がいないので入院できません」とか「大阪の妹に世話を頼んでみます」と言って予定通り入院とならない方が年に数例は現れる。ドクタードッグの月1回の導入でさえかなり苦勞した経験があり、入院時のペット持ち込みなどは私の実力では無理。貴学において先端的に研究的にそういうことは出来ないだろうか？「病院は家庭に近いほど良い病院」というのが私の理想の病院像である。新設医大が金太郎飴の如く皆同じなら存在意味がなく、全国に約9,000ある病院のどこかにそんなチャレンジャーがほしい。盲導犬の立ち

入りが常識となったように…。日野原重明先輩は「音楽療法が国家資格になるまでは死ねない」と頑張っておられたが、私も生きている内にこんな病院を見てみたいものである。

国は、デジタル後進国からの脱却を目指しデジタル庁の設置を急いでいる。トヨタは裾野市にスマートシティーの起工式を行い、京都大学の今中雄一先生もヘルシースマートシティー構想というものを最近発表された。この構想には私も少しお手伝いしたが、健康や医療を核とした地域づくり、街づくりは高齢少子化の日本にとって大命題であり、医科大学にとっても大きなテーマであろう。奈良県立医大はMedicine Based Town (MBT) 構想でコンソーシアムを立ち上げている。近鉄や大和ハウスなど地元の有力企業やツムラなど地元発祥の和漢薬メーカーも名を連ね、大学近くの今井宗久ゆかりの今井町を脳血管障害患者のリハビリのために空き家を利用したりとユニークな街づくりに取り組んでいる。自治医科大学からの帰路、この大学がメイヨークリニックのような役割を果たし、この街のゴールが大学都市ハイデルベルグになればと考えている。「夢がなければ実現しない」稲盛和夫氏の言葉である。また、国連を中心としたSDGsという運動がある。これには世界各国の政府や企業、大学や家庭、個人が参加しなければならない。貧困からの脱却、教育や環境、人種や性差別の払拭など17の目標で成る。医科大学として、この分野での貢献も望むところである。

色々と夢の提案をさせていただいたが、その実現には資金が必要である。コロナ禍で患者の受診控えや受験生の地元重視などで収入が減り、大学の運営が厳しいことは想像に難くない。私の関係する大学でも、アルバイトや仕送りが減ったり無くなったりした学生から退学や休学の相談が多くあり、授業料減免などの措置をとったり奨学金枠を増やしたりした。財源の最後の切り札はクラウドファンディングであった。幸い京都には京セラの稲盛和夫氏、任天堂の山内溥氏、日本電産の永守重信氏などベンチャーから身を起こした方々のドネーションの風土があり、かなりの金額が集まった。学生の教育だけでなく研究などにも活用できるような仕組みとしている。自治医科大学は47都道府県が設置母体である。大分県平松守彦知事の二番煎じと言われるかも知れないが「一県一研究課題」などを知事会に提案、働きかけてファンドを創るのも一つの方策と考えている。

思うままに徒然草風に書かせていただいたが、最後に更に突飛なことを追加したい。マキャベリ風と言えば最近の日本には正義なき力が横行し、我々は力なき正義と失望している。そこで自治医科大学から正義ある力を出してほしい。我が国は一応民主主義なので、国会議員の候補者を立てたい。その候補として知名度抜群の尾身茂氏、行動力やマネジメント力ピカイチの吉新通康先生あたりはどうであろう。また、国診協の組織内候補として青沼孝徳先生や小野剛先生、赤木重典先生なども面白いのでは。何分勝手連なので、きっと皆様方は怒るか笑い飛ばされるであろうが…。兎にも角にも、80ある医育機関で私が最も期待しているのは貴学と奇人変人の多い我が母校の2つである。更なる発展に挑戦していただきたい。

関係各位のご健勝を!! コロナが落ち着けば校歌を堂々と皆で歌いましょう!!